

## 房総半島および伊豆半島からのハネナシナガクチキの記録

亀澤 洋

〒350-0825 埼玉県川越市月吉町 32-17 (kamezawahiromu@gmail.com)

Records of *Nipponomarolia kobensis* Miyatake, 1982 (Tenebrionioidea, Melandryidae)  
from the Bôshô Peninsula and Izu Peninsula

Hiromu KAMEZAWA

## ハネナシナガクチキとは

ハネナシナガクチキ *Nipponomarolia kobensis* Miyatake, 1982 は、体長 3–8mm ほどのナガクチキムシ科の小甲虫である。和名にあるように、上翅の左右が癒着傾向にあり、後翅は退化している。ハネナシナガクチキ属 *Nipponomarolia* は、兵庫県神戸市須磨区白川台をタイプ地として記載された本種を模式種として、創設された。Miyatake (1982) は、同時に四国(愛媛県松山市)からマツヤマハネナシナガクチキ *Nipponomarolia matsuyamensis* を記載している。その後、中根 (1989) が九州の宮崎県(現在の都城市青井岳)、福岡県(宗像市と遠賀郡岡垣町の境界にある城山)、熊本県(水俣市大川)の3地域で得られていた3個体をもとに、それぞれアオイハネナシナガクチキ *Nipponomarolia nagaii*, ジョウヤマハネナシナガクチキ *Nipponomarolia kidoi*, ミナマタハネナシナガクチキ *Nipponomarolia oharai* の3種を記載したので、ハネナシナガクチキ属には現在5種が知られている。国外からの報告はなく、目下のところ日本固有属である。

成虫は冬季に出現し、林床の落葉落枝層で生活するため一般には目につきにくく、発見例はきわめて少なく散発的であった。しかし、生川・横関 (1997)、西田 (2004)、蟹江 (2014) らにより、採集法や生息環境などについての詳細な報告がなされ、採集例は増加してきている。ただし、各地の個体群間の形態についての十分な検討はなされておらず、本属の全貌はいまだ解明途上ではないかと思われる。

## 各地での記録

本属は本州(関東地方以西)、四国、九州に分布し、照葉樹林または二次林に生息する。ハネナシナガクチキ *N. kobensis* のタイプシリーズ(1♂6♀♀)は松類の朽ち木下から得られ、マツヤマハネナシナガクチキのタイプ(1♂)はスギ枯れ枝中の蛹室内から新成虫として採集されている(Miyatake,

1982)。また、愛知県下での蟹江 (2014) の観察によれば、アカガシのやや古い落枝の材中から幼虫や新成虫が見つかり、幼虫はその材部を食べ、年1化と考えられている。後翅が退化しているため、各地で種分化している可能性もあり、日本列島に最終的に何種が生息することになるのかは不明である。水野 (1992) が指摘しているように、これまで記載された種も含めて少数の種にまとめられるか、あるいは地域ごとに多数の種に分類されるということになるのかもしれない。地理的な変異のほかに、個体変異の幅が大きい種群であることも指摘されている(水野, 1992, 2011; 西田, 2004)。

ハネナシナガクチキ属は、タイプ地のほかに福岡(水野, 1992, 2011)、佐賀(西田・廣川, 1995; 今坂・西田, 2004; 西田, 2004, 2005, 2010)、長崎(今坂・緒方, 1985; 西田, 2004; 水野, 2011)、大分(上野, 1993; 水野, 2011)、宮崎(水野, 2011)、熊本(水野, 2011)、鹿児島(水野, 2011)、香川(佐藤, 2007, 2013; 水野, 2011)、徳島(水野, 2011)、岡山(山地, 2005; 鈴木, 2011)、大阪(水野, 2011)、和歌山(的場, 1992; 水野, 2011)、三重(生川, 2006, 生川ら, 1995, 2006; 横関・生川, 1996; 水野, 2001, 2011)、愛知(蟹江, 2014)、静岡(水野, 1992; 多比良, 2005)、神奈川(宮谷, 1996) などから生息情報がある。このうち本州からの記録はすべてハネナシナガクチキ *N. kobensis* として報告されているほか、一部は四国、九州からの記録にも本種名が当てられている。

## 房総半島における発見

東日本からのハネナシナガクチキ属の記録は、現在でも西日本に比べて非常に少なく、太平洋岸の照葉樹林帯に限られている。筆者は、千葉県房総半島の最南端で本種を確認しているので報告する。これまで神奈川県(三浦半島)がもっとも東の記録だったため、現時点での最東限の記録となる。

2♂♂, 千葉県南房総市白浜町乙浜, 31. XII. 2013; 1♀, 同地, 1. I. 2014, 筆者採集, 保管。

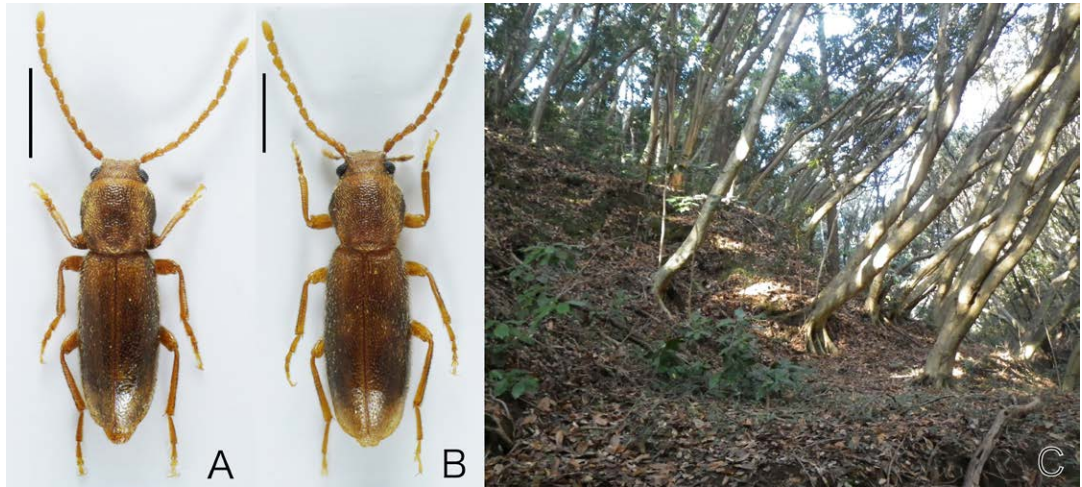


図1. ハネナシナガクチキ. A, ♂; B, 同♀ (以上, 房総半島産); C, 生息環境 (千葉県南房総市白浜町) スケールは1 mm.

房総半島では、古い時代に移植されたとされるマテバシイが優占する樹林内の落葉落枝層を、シフティングして採集した。採集した場所は南側の斜面で、時間帯によっては木漏れ日が差す程度のやや暗い林内であった。尾根部に近い場所で、木は胸高直径20–30 cm程度とあまり太くなく、原生的な樹林環境ではなかった。

また、具体的な採集データをともなった記録を見いだせなかった伊豆半島産も手元にあるので、ほかの採集者のデータも合わせて記録しておく。

5♂2♀♀, 静岡県伊豆市天城湯ヶ島町猫越, 20. XII. 2006, 遠藤千秋採集; 5♂4♀♀, 同地, 20. XII. 2007, 遠藤千秋・筆者採集, それぞれ採集者が保管。

同地は、アカガシ、ウラジロガシ、スダジイ、カゴノキ、タブノキなどの高木がみられる暖温帯の天然林で、水源涵養保安林であるとともに植物群落保護林である。この場所は原生的な環境であったが、やはり尾根部に近く、湿度の高い谷筋からはやや離れていた。シフティングにより現地で確認したほか、一部リターを持ち帰り、簡易式のツルグレン装置にて抽出した。遠藤氏が採集したものは、すべて持ち帰ったリターからハンドソーティングで得たそうである。

なお、今回、千葉県および静岡県から得られた個体群は、ハネナシナガクチキ *N. kobensis* とは別種の可能性もあるが、現時点では本種を当てておくのが妥当と考えられる。

今後、多くの地域から得られた標本をもとにした専門家の比較検討によって、本属の全容が解明されることと期待したい。

### 性差について

原記載で明示されていることではあるが、過去の記録をみると得られた個体の雌雄の別が示されていない場合が多いので、この点について付記する。

背面から検鏡した際にわかりやすい区別点は脚にある。雄は雌と比較して、各脚ともより強壯で、同程度の体長の雌雄を比較すると、脛節、腿節いずれも雄のほうが太い(図1A, B)。雄では前附節が全体に横に広がる傾向にあり、基部の第1節も他節と同様に広がる。雌では前附節の幅が雄ほどではなく、特に第1節ではあまり広がらない。前附節の基部第1節の長さと同様に幅が雄では同程度であるのに対し、雌では節長が長く幅の2倍近くあり、顕著な性差がみられる(図2D, E)。中附節や後附節にも同じ傾向が認められる。性的二型を示す脚の形態的な特徴は、交尾体勢が多くのナガクチキムシ科と同じくマウント型であることを示唆していると考えられる。

さらに、腹部背板の見かけ上の最終節は上翅末端から露出しているが、ハネナシナガクチキ *N. kobensis* では、雄の尾節後縁が広く丸まるのに対し、雌では切断状で台形を呈する。ただし、九州産の種では中根の原記載を見るかぎり、種によっては雄も切断状のようである。

以上の特徴の多くは、実体顕微鏡下でも十分に観察できる。

なお、本研究の一部は科研費新学術領域「生物規範工学」の計画研究「バイオミメティックス・データベース構築」(課題番号: 24120002; 代表者: 野村周平)の助成を受けている。

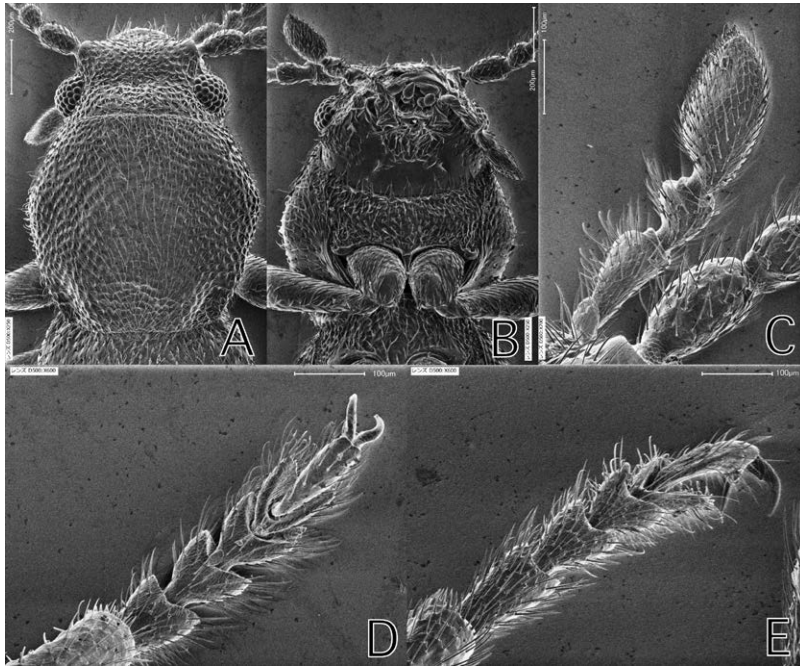


図2. ハネナシナガクチキ. A, 頭胸部背面(♂); B, 頭胸部腹面(♂); C, 雄の右小腮鬚; D, 雄の左前附節; E, 雌の左前附節. すべて房総半島産.

## 謝辞

末筆ながら、伊豆半島で本属が生息する場所として現地を案内してくださり、データの公表を一任された遠藤千秋氏(秦野市)、文献の問い合わせに応じてくださった今坂正一氏(久留米市)、ジョウヤマハネナシナガクチのホロタイプの採集者で有益な情報をくださった城戸克弥氏(大野城市)に深く感謝する。また、草稿を読んでご意見をくださった生川展行氏(鈴鹿市)、国立科学博物館の野村周平博士に心よりお礼申し上げる。

## 引用文献

- 今坂正一・緒方 健, 1985. 1984年に採集した多良岳の甲虫. こかねむし, (45): 16-21.
- 今坂正一・西田光康, 2004. 武雄市宇宙科学館周辺の甲虫相. 佐賀の昆虫, (40): 771-804.
- 蟹江 昇, 2014. ハネナシナガクチキの採集法と幼生期の生態. 月刊むし, (515): 36-38.
- 的場 績, 1992. ベルレーゼ法で採集した甲虫類 1. KINOKUNI, (42): 11.
- Miyatake, M., 1982. A new genus and two new species of the tribe Hypulini from Japan (Coleoptera, Melandryidae). Transactions of the Shikoku Entomological Society, 16(1-2): 29-35.
- 宮谷秀明, 1996. ハネナシナガクチキを三浦半島で採集. 神奈川虫報, (114): 69.
- 水野弘造, 1992. ナガクチキムシ漫談(5)―九州産ナガクチキムシの記録と解説(3). 北九州の昆虫, 39(2): 83-92.
- 水野弘造, 2001. 水野弘造の20世紀甲虫誌―虫寿記念―. 関西甲虫談話会編, 関西甲虫談話会資料, (18): 1-146.
- 水野弘造, 2011. ナガクチキムシ類. 初宿成彦編, 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録(1), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, (43): 125-197.

- Nakane, T., 1989. Notes on some little-known beetles (Coleoptera) in Japan. 北九州の昆虫, 36(1): 1-10, pl.1.
- 生川展行, 2006. ハネナシナガクチキ. 318p., 三重県環境森林部自然環境室編, 三重県レッドデータブック 2005, 498 pp.
- 生川展行・横関秀行・天春明吉・川瀬英夫, 1995. 三重県でハネナシナガクチキを採集. ひらくら, 39(3): 45.
- 生川展行・横関秀行, 1997. ハネナシナガクチキの採集法について. ねじればね, (75): 7-8.
- 生川展行・市橋 甫・天春明吉・市川太・稲垣政志・官能健次・前川和則・横関秀行, 2006. 熊野灘沿岸照葉樹林の甲虫類, 63-188 pp., 三重昆虫談話会編, 熊野灘沿岸照葉樹林の昆虫.
- 西田光康, 2004. ハネナシナガクチキの採集方法と個体変異について. ねじればね, (108): 1-3.
- 西田光康, 2005. 佐賀県産甲虫目録(未記録種を含む). 佐賀の昆虫, (41): 1-48.
- 西田光康, 2010. 大野原高原周辺の甲虫. 佐賀の昆虫, (45): 405-418.
- 佐藤正昭, 2007. 四国で採集した甲虫(1). へりぐる, (28): 5-12.
- 佐藤正昭, 2013. 四国で採集した甲虫(7). へりぐる, (34): 13-15.
- 鈴木 茂, 2011. 岡山県産甲虫類採集記録(3). みちしるべ, (47): 452-453.
- 多比良嘉晃, 2005. コウチュウ目. 107-163 pp., 静岡県環境森林部自然保護室, 静岡県野生生物目録
- 上野輝久, 1993. 落葉層のヒラタムシ上科・ゴミシダマシ上科. 昆虫と自然, 28(2): 11-18.
- 山地 治, 2005. 岡山県で採集した甲虫類の記録. すずむし, (140): 79-84.
- 横関秀行・生川展行, 1996. 尾鷲市須賀利でハネナシナガクチキを採集. ひらくら, 40(6): 309.

(2015年2月6日受領, 2015年2月25日受理)